

夜明けまで
(創作)

はつ秋の喜悅

雀●外篇

あかさび

不思議な憧れ

新聞紙發達の誘因と記者の推移 齋藤昌武

静かなるまゝに

或る友へ

詩

母へ（散文詩）

村のサラリーマン（隨筆）

秋
(短歌)

身邊雜集

編輯後記・小規摘錄・

橫山隆

吉澤

三 野 混

片寄耿

齋藤孝夫

推移齋藤昌武

齊
藤
孝

木
田

澤美

關
研
治

伊藤公平

鈴木貞子

吉澤健

社 ス ナ タ ラ プ

創刊號

スナタラブ

〇 - ・ 二 三 九 -

序 詞

喜び、喜びの激越、存在し存在するであらうす
べてのものを照す太陽
創造の崇高なる歡喜
創造するより他に喜びはない。
造する人より生きてゐる者はない。

ロマン・ローラン

・ 品質本位 ・

若松兄弟牧場

平 町 柳 町
電 話 5 5 2 番



マルトモ書店

電話 2 3 4 番

マルトモ運動具店

電話 5 9 7 番

マルトモ食堂

電話 1 2 3 番

久保田パン店

本店 平 警察署通り
賣店 平町三丁目横通り
電 話 3 8 3 番

夜明けまで

——この一篇をn子に與ふ——

若草編輯部 横山 隆

序詞 マルセル、マルチネ「夜」

この空の下では
ナンと言ふ澤山の惨めな出来事が
行はれるのだらう

アンヌ・マリ……アンヌ・マリ
起きなさい 夜が明けたよ
モウ目をさます時だよ
さあ、起きる時が来たよ

夜明けまで (1)

チリ／＼燃え盡きてゆく蠟燭の火に、正は追は
れる様に活字を拾つて行つた、頁をくる途端チク

リ毛脛を刺された。

「畜生の」と手を振上げる拍子に、デリリツとロ
ーソクが消えて、蚊はブーンと闇の中に飛んだ。
「チエツ」舌打ちし乍ら、正は燃え盡くしたロー
ソクの匂の漂ふ闇を透して、二断線された電燈のあ
たりをデツとにらんだ。

「電燈が發明されて世の中が明るくなつたなんて
有難がる奴は誰だ

電燈が輝く世の中に、ローソクをつけなきやア
ならなえ俺達は却つて暗くなつたんだ。

電燈が發明されて嬉しがるのは儲け口を見付け
た奴だ。

俺達に取つちや、奴らに搾られる新しい手段が
發見された事を意味するんだ。

富の一方への巨大なる蓄積は、貧の一方への巨
大なる蓄積となる——これ即ち富の本源の蓄積な

りしか

一方が明るくなれば一方が暗くなる。

んだ。」

先刻迄讀んで居た本の中の文句と、消えたロー
ソクとが闇の中でこんがらがつて、こんな文句が
正の口の中をモガ／＼させた。

「兄さん、ローソク消えちやつたのに、ナンシテ
居んの……」

タイちゃんはモウ来る時分だに……」
さつきから寢返へりを打續けて居た美代が蒲團
の中から聲をかけた。

その動きで闇の中に産褥後の残り香が微かに嗅
かれた。それが堪らなく正をムカつかせた。加之
に憎んでも飽き足らない地主のドラ息子の子を孕
んだ體の匂ひだと思ふと汚らわしさに、ムカ／＼
と吐き氣さへ感じた。

それにしてもタイ子はもう来る時分だ、今夜は
來ないだらうか」フツ淋しい氣持に襲はれた。

「俺は一體、彼女の來るのを待つてるんだらうか
馬鹿なッ、そんな氣持は少くとも今の俺の心の

隅つこにもない筈だ。

地主の娘に關心を持つなんて……そんな馬鹿な

馬鹿、馬鹿ッ、チエツ」

林檎の様に、健康さうな紅い頬、クリ／＼
しなやかな髪を結つたアゴ、鐵砲弾を思はせる顔……
彼の所謂戦斗的シャラン典型的な彼女の顔が闇の

中に浮んだ。
「ベエツ、消えて失せろ」闇の中に、正は勢込ん
で唾を飛した。

「俺は地主の娘の來るのなんぞ待つてやしないん
だ。なんといふ大きな馬鹿が俺に巢食つてゐるん
だ。キツバリ清算しろ」

「兄さん、タイちゃんは今夜來ないの」美代は又
くりかへした。

「馬鹿ッ」咽喉まで出かゝつた聲が急につかへた

「美代ちゃん、休んだの」
憚る様な聲だ。

二人が先刻から待つてた聲だ
正は危く返事する所をグツと堪らへて、強く頭
を振つて、髪の毛に指を突込んだ儘、机の上に突
つ伏した。

「休んだの」

「イ・エ、未だ……チョット待つてゐネ」

美代の起上る氣配がした。佛壇の下をガタ／＼言はして居たが、やがて探し出したローソクにマツチをすつた。

ローソクの灯に、大きな影法師が二つ殺風景な部屋の中に映つた。

二人は、黙つて机の上に俯いてる正を見守つて暫く顔を見合せて居た。

そして三人は三人、三人の心を讀んだ。

三人の間に、沈黙が冷めたく擴がつて行つた。正はきつと面を上げた。太い眉毛と眉毛の間に固い決意がローソクの火に冷やかに照し出されたタイ子を振り仰いだ正は、固く結んでゐた唇を開いた。

「タイ君、歸へつてくれッ」

地主の娘にやつて來られる事は俺にや真ッ平だ地主の娘の親切ごかしのオコボレなんぞ御免蒙る。

俺達小作人の不幸はみんな地主のお陰なんだ。借金や小作で搾り足らなえで、その上俺達の體ま

でオモチヤにしやがるんだ。

體をオモチヤにされ、骨の髓までシヤブられた奴は、ソレその側にも居るぢやねえか」

彼はゴクリ唾を呑みこんだ。

タイ子はソツと側の美代を見た。

やせ衰へ、やつれ果てゝひよろりと立つてる美代の體、彼女の頬を傳つてゐる一筋の涙の冷い光りを見た。

タイ女の顔は蒼白く傾へた。

正も美代の涙を見た。憎しみと憤りの焔が胸一杯に燃え上つた。

敵の一人が自分の前に立つてゐるんだ。

さうだ、こいつも敵の一人なんだ。

こいつを戀するなんて馬鹿なッ——

焔がメラ／＼煽られた。

「おいッ、タイ子、

地主つて奴は一體ドンなケダモノだか、今迄一度でも考へた事があるか

よく聞けッ、地主つて奴や俺達の油虫なんだ。

食へついて離れなえ、そして俺達から腹一杯うまい汁を吸ひやがるダニだ。

貴様のオヤデもその一匹なんだ。

何百俵納まる上げ米だつて見ろ 遠い所からヤツコラ、スツコラ、一年の自分達の油汗を俵の中に積込んで持つて來るのに、それを一タブツ解いて、古い標査も受けない昔の大楨で計り直して、それで一寸でも楨足らずだと、その儘突つ返へす遣り方はドウだ。

利息ではかりもトツクに元利を取戻した様な古證文で、三百代言を使つてギリ／＼に貧乏人を搾り上げる極道振りを見ろ……」

「モウ澤山です」タイ子の聲は哀れみを乞ふ様に細く震へた。

「……一昨年の暮にコツソリ下の源き親子の夜逃げしたのも、去年の大晦日に向ひの吉爺が、貴様の家の前の松の枝に目出度くなつたのも、畜生奴そのダニの爲なんだ。」

「澤山です、後生ですから」

「イ・ヤ、まだノ」

こうして俺達から搾り取つたので、四人も五人も妾を置ひ、その揚句、其處此處の小作人の娘まで手にかけて、貸金や上げ米の滞りを口實に踏み躪

られた人達の口をどんなに塞いでるんだ。

地主だから、借金があるから、上げが滞つてるからで、泣寝入りしてゐる貧乏人がどれ丈あるか知つてるか。

こゝにも、コレこの通り一人居るんだ。

それを、その地主のお嬢さんがアヤしてくるなんて事はキツバリ俺が斷る。

地主なんてケダモノからこれつばかりのお爲ごかしや御慰めは頂き度くなえんだ。」

シク／＼と嚙り泣きが起こつた。

部屋の際に崩れ折れた二人は寄合つて泣いてゐるのだ。

「おい、タイ子ッ、歸れッ

何を泣いてゐるんだ、何がやしいんだ

泣きたいのは俺達だ、口惜しいのは俺達だ。

「搾られ、虐げられ、妹までシヤブられ……だが俺にや出る涙なんざねえんだ。

胸の炎に、涙なんざア干かれつちやつてゐるんだ「兄さん、もう止めて……みんな私が馬鹿だつたんだから。」

美代が泣き聲をふり絞つた。哀願する様な眼だ。

「タイ子歸れッ」

「判りました。歸ります。」タイ子は部屋の隅から起ち上つた。

彼女の眼からは涙が消えてゐた。紅味の失せた蒼白の頬に名残りの一滴がロソクの灯を受けて光つた。

「左様なら」

美代が袂で眼をこすりながら起つて来て、建て付けの悪い戸をガタ／＼させ乍ら開けた。

戸口にタイ子は立つて、正の方を見返つた。

正はスツクと机の前に起つた。

二人は立つた儘、眼と眼を見合つた。

二人の間に冷いものが流れた。

「タイ子、最後の言葉だ。」

明日から敵と味方だッ」

キツバリとした口調だつた。

今迄熱してゐた彼の口から出るには餘りにも冷然とした口調だつた。

タイ子は總身に冷い電光が走つた。

「よッく判りました。」

私ももう参りません。

永久に左様なら」

彼女も出るだけ、冷靜に言つた。然し最後の言葉は顫へてゐた。

「あの」「馬鹿ッ」美代の聲は、ビシヤリと邪慳に閉められた雨戸の中に消えた。

闇の中に出たタイ子は奈落に落ちた者の様な自分を意識した。

——自分の後にビシヤリ閉てられた戸、最後に言つた自分の言葉、據り所のない自分、——冷靜に歸へつた心算の自分の頬に、一雫が傳ふて闇に落ちた。

x

座敷はタイ子が脱け出た時より騒々しく賑はつてゐた。妾のお富の聲がキイ／＼はしやいで居る「あの時から未だ酒盛が續いてるんだ。」

あゝ嫌だ。阿呆龜が又來てる。本當に何んといふケダモノ共だらう」

彼女はソツト抜き足に自分の部屋に廻らうと、

障子一重の座敷の縁側に上つた。

「アッハッハ」座敷の中に起つた淫らな皆の笑ひ聲は彼女の拔足を止めた。

兄の和雄と陸軍少尉龜藏の聲だ。

「ボテレンにしちやつたんか

フ、フ、君が……ン下りつちやつた……

さうか……ウー、そんならナアに心配しなくつていゝさ

なんだア、可愛想なんか」

「可愛想だ フンそんな佛心があつたら初めからこんな事はせんがなア

實ア可愛想ナンて事でなくつて、心配なんだ」

和雄の聲はオド／＼してゐた。

「フツフツ、心配だア、止せやア。月とスツボ

ンだ。

あいつらとこららは第一身分が違ふんだ。チ

ヨッピリ金でも放つてやりア、タツペラスツペラ

だ。あの婆アなんざ有難涙をこぼすから見ろ。

それとも、君ア美代の阿魔を嫌にでもするつて

エのか ヘッヘッヘ」

陸軍少尉は虫ずの走る様な黄色い聲で笑つた。

丸い禿頭がムク／＼と起き上るのが障子に映つた

「ナンチユツタツテ……斷じてエー俺がきかねえ

」

今迄酔つてウト／＼してたらしい父の勤兵衛が

寢呆聲をリン然と張上げた。

「俺ン所は地主様だエ……小作のガキ一匹二匹孕

ましたつて……ウー……何んでえ……

俺だつて若けえ時や……イーヤ……

ン、和ッ、貴様ア何んちうヘマをやりやがつた

んだア、

俺を見ろエ、ヘン俺なんざア……

馬鹿野郎ッ、

……

エーッ、金の一包も放つてやれッ」

「お父さん、聲が……」

「喧しい、馬鹿野郎ッ、それで悪かつたらエーッ

と……田だ……田だ……

田を取上つちめえ……

ウッ……でなけりやあの古説文でも持出して

ギユー／＼言はしてやるんだア

大抵の虫ケラ共ア口が塞がらあ……

和ッ、俺ん所は地主様だえ、シー高が小作の阿

魔ッチヨだ……」——[以下次號]——

詩

はつ秋の喜悅

吉澤健

とても喜び得ない喜びを
俺は一人で喫つてゐる

野邊はるか
× ×
バツと白煙があがると
ズドンとをどし銃が鳴る
陽光は白々と田の面にあまねく
あゝ
秋は俺達の頭上に廣い

雀

三野混沌

いゝ天氣だ
穂はみんな空を指差して
白々と花をつけてゐる
田植の勞苦を
除草の熱汗を
今はさらりと忘れさせて
九月は俺達の頭上に訪ずれる
× ×
穂と穂が
あるかなさかの風に
相寄り相觸れて
玄妙な初秋の歌を奏でる
俺は愉快だ
半歳に渡る愛の力に育ぐまれて
やうやく結晶の秋が來たんだ
ブルデョアのお嬢さんや
お坊つちやん達には

ゆふべの沙畑
柿の葉が紅くめだつてきた
柿の葉が紅い梢に
雀は群れはじめた
沙畑には、早い穀物が
穂を垂れてゐる
みよ、柿の梢のむらさきの空
柿の葉の中にかくれる群雀

もろこし

漣の上、畑にもろこしが
雨あがりの露をおびて
いろづき、こゝみはじめた
鴉めが向ふ側から鳴き出した

りんご

りんごのはなはきれいだ
そのみよりもきれいだ
にんげんもしぬとりんご
のはなになる

あかさび

市街のはて

片寄耽二

ふくらひで行く市街のはて
ふかみ行くおほぞらの
あふれこはれる秋のいろどり
市街のはて野につゞく
幾うねり のこぎり屋根の秋はさみしい
夜をこめ
晝をついて
幾百のべるとはあふれ流れる
油じみの背をひるがへし
ふんふんと散る鐵粉を浴び
ましん油のしぶきにうらぶれた生命を愛した
らせんの糸がく黃銅のせんちめんたる
たくましい機械の感情の羅列に
じんあいを巻き炎をもえたゝせ
明けても暮れてもわたし達はいどまねばならなし
ひねもすにく體を沈めねばならなし
四方の窓は何故開かない
ふわりと雲は浮いてゐるのに
防風林のふかいあさに

あゝ朝が去つた幾つもの朝が
たそがれが来る幾つものたそがれが
わたし達の窓邊にはまだ赤さびがほろほろ落ちる

失 題

中 川 基 夫

親子三人
まつくら闇の土手を歸る
手下げランプの光と 影が
もつれてはとけ進む
土手の傾斜面の
柿 無花果の大樹も
ようやく存在がわかるばかり
切拂はれたグミの株も
この邊かと思ひ得るだけだ
父は
段
吠で十六半の四石九斗五升
五分メリで二石四斗七升五合
作は悪いことあないとほくそ笑んでゐる
自動車に頼うか

葉書を出そうか
隣町の姉に送る白菜の算段にふける母
そしてはつとしてはランプを横に差出す
手下げランプを先に立てゝ
土手を歸る
作は案外悪くないぞ
父の聲

後の二人を氣づかつて
ランプを横に差出す
母の横顔
背の荷をゆすりあげて
腹がすいた
腹がすいたといふ息子
俺はふとい、詩を作つた様。氣になつた
高らかに高らかに歌つてみたくなつた
空は真くら
雨は今夜の中に降りだすに相違ない
俺達親子三人が沖の野良に飛出して
半乾きの稲束を
架にやうやくかけ終へて

歸途につく頃にはもう唯も野にはゐなかつた
空は真くら
野も真くら
闇の野良には
藁焼く煙りすら見えぬ
何時だらう
大分遅いぞ
弟達は大根を煮しめたまゝ待あい
轉寝してゐるかもしれない
「まつくらな闇の土手を
手下げランプを先に立てゝ
親子三人むつまじく歸る」
俺はとう／＼歌つてみたくなつた
俺達三人の親子は
色々、様々、勝手に、別々に考へてはみたけれど
矢張俺達は親子だ
矢張俺達は親子なんだ。
俺はこう思つた時
涙が出る程嬉しか
「親子三人むつまじく歸る」
もう一度口ずさむでみた

(舊作)

不思議な憧れ

齋 藤 孝 夫

かすかな雨音の中でねむつてゐる山のうすい波
昨日の丘を
またかけ上つて行く今日の放心した私
シグナルに青い燈がボツカリうかび出ると
矢張りぬれた夜汽車の窓に
執着がひきずられる
不思議な憧れ
かすかに流れてゐる鐵路のうめきよ
私は私の一つ一つにせんりつを感じて
かすかな吐息の行方を追ふ
感傷にやんで
激しくせき入る私の心に
のこされた悲しみが
しょんぼり……「死ねなかつた」
しかし
昨日の丘をぬれて下つてゆく
私の心に、もう異なつた
不思議な憧れか湧いてゐる

新聞紙發達の誘因と記者の推移

齋藤昌武

はし書き

左の小録は自らが早稻田に在學中新聞の研究室で學校新聞の編輯、實習原稿書きの等の折新聞と云ふことを通じて書き記したときの原稿である、勿論學生としての餘暇につづつたものであつて、専門的にも學究的にもつまらないところがあるかもしれないが意のあるところを通じて讀んで下されることを願ひして置く

曾てウハリアム・ジェームスの高弟として、現には「紐育ウオールド」紙の主筆として名聲のあるウオルター・リッヅマンはその好査輿論のなかで輿論の性質はその國民小さくしては政黨或は社會の諸團體の様なものゝ赤裸々なる精神的表現であつて、これを透してその各々の内容を透察することが可能だ、即ち健全なる團體とは健全なる輿論を所産し得る團體を意味するものと極言し得ようと論じた。かくてリッヅマンは社會共同生活體においての人間の精神的糧食が所謂健全なる輿論にあると説明してゐるのである。

而してこのリッヅマンの輿論説明の全部が眞の解釋でないにしても、輿論の動きといふことが社會精神文化の上に一つの大きな刺戟を與へるものであると位はいへよう。そうしてこの精神動力としての輿論が所謂新聞紙の専有性であり唯一の武器であると推斷し得よう。こゝに社會的機構としての新聞紙が必然的に進歩し得る新聞紙性來の社會進出性があるのだと自分は考へる「新しいことを知りた

い」新しい出來ごとを知りたい、この心理的傾向は、人間が社會に對する要求として、その環境と時とを問はず、社會生活をなす人間の必然性の表現として、それが古い時代にあつて、いまだ何等の交通手段がなかつた時代にあつても、人々のもつニスへの好奇心は一層大きかつたらう。昔、新聞記者といへば頭からけなされた時代があつたらしい。つまらぬ「探訪」とか種さがし位の簡單粗雑なものとしてかたづけられてゐた新聞及新聞記者は單に資本力の豊富な政黨や政治家等の一部の特殊階級ともいふべき少數に依つて支持されてゐた時代であつたが我國の新聞事業にしても今日で大約五十餘年の日月を経るまでに少くとも新聞事業が報導機關、營利事業としての社會上重要な今日の役割を演ずるまでに至つたのである、従つて新聞記者そのものの社會的地位もかなり理解されもしてきたし向上もした。……〔未完〕

詩

靜かなるまゝに

齋藤孝夫

淡い夜霧のもつれ
無限の心に
ひそめられた無限の力が
硝子屏の中の
夢中で食ひ込んでゐた
耐えきれずに
威度を失つた肉體のどこからか

涙と すゝり泣きがうすもれる
心弱くも

「生活を知らぬ生活者のものだ」は
今宵もしきりに
霧の町の灯に
明滅する

或る友へ

木田強

労働者だとかプロレタリアだと
すぐ口にする君は
俺とは正反對に
地主様のお坊つちゃん

貧乏が好きだ
 貧乏が好きだと
 くり返す君に
 その意をたゞせば
 たゞ最後まで言ひはるだけ

労働者の生活を夢の様に描えて
 愉快がる君は
 貧農の生活を
 詩的だと仰言られた
 今年は豊年だからとて作米を値上げる地主様
 家の待遇が悪くて と云ふその息子

金時計をヘナ／＼腕に巻きつけて
 「俺達貧農は……」と叫ばれる君よ
 そんな流行が
 若し有つたとしても
 それはもう
 時代遅れではないだらうか

その折に

澤美枝

秋の風がそゞろに
 寒く身にしみた朝
 露にぬれた葉を
 ふみしめ／＼
 解されぬ人生觀を
 徹し得ぬ孤獨を
 デツと考へた
 何故こんなに
 苦しまねばならないのか
 何故こんなに
 弱いのだらう

時は移つて行つた
 秋は更けて行つた
 されど吾が苦は
 いや増しに深められ
 解し得ぬもの……となつた

母 (散文詩)

關研治

(一)
 親と子、それは人間として斷つべからざる鐵鎖
 であり、不可避的愛情の對立物であらう。

だが………彼

生郷離れて三百里、磐城の山家に星としたしむ

(二)

凡てを堪へ、凡てを許し、そして凡てを育てて
 ぬた温情の母……長き忍苦の時を終て來た、だが
 然し堪へつくしたる後に破壊、愛しの子は去つて
 行つた

噫 凡ては覆がへされ、凡ては掠奪つくされた

いま母は哭いてゐるであらう悲しみの果に、

……いま母は限りなく哭いてゐるであらう。

だが………母よ

ゴリキ一の母も泣いて哭いた、そして後に識つ
 た、そして闘つた 子と共に

母よ許せ

生郷離れて三百里、磐城の山家で子も哭いてゐ

る

母よ健であれ永久に、そして、そして起ふ共に
 ~~~~~

豫約募集

吉澤健 短篇集【I】

豫約〆切 十一月二十日  
 發行 十二月一日

プラタナス社版

或る農婦の結婚前後  
 家出者・外篇  
 母・四篇

村のサラリーマン (隨想)

伊 藤 孝 平

自惚はれつて奴は恐ろしい。  
おだてつて奴もたちが悪い。

田舎の小學校の成績が少しよかつたばかりに  
彼氏の人生行路の出発には、たしかに失策があつた、五十や六十の小人數生徒の中で極ほんの僅かばかり成績のよかつたことがいけなかつた、元來百姓家に生れた彼氏のことだから黙つて親の跡をついで田畑を耕してゐればよかつたのであるが、これからでは少し遅い。

小學校の先生にしたところで何もそう中學へばかり卒業生を入れ様とするのがすでにあやまつてゐる、あやまつてゐる位のことでは先刻御承知なんだらうけれどそうせねばならぬところに彼等の悲哀がある毎年行なはれる中學の入學試験といふやつが小學校の教師連にとつて頭痛の種である、あの小學校から五人來て四人パスしたあすこは八人來て三人きり入學が出来ない。など、入學出来な

かつたことが、その學校全體の成績の如き世評が起り、視學様が直ちにこれを基として教師の優劣をきめひいて月給の多寡を知らんやだ。斯うなるに背に腹はかへられぬ國民教育家たちがその子の眞の將來を考へるよりは己の現在を考へるに急になつてしまふから少しでも成績がよいとこれをおだてあげて中學へさしむける、おだてられて見ると親父もまんざら悪い氣もしないから中學へと進ませ軍てしまふ。

中學の五年間教師を困らせたり、裁縫學校の女生徒にラブレターを送つて謹慎を喰つたり、世間並のだらしない中學生活を送るとその後にくるものは、上級學校志願だ。何さて中學を出ただけではめし食へるものではなし、同輩の誰彼が高等學校の大學のご進むのを見れば、まんざら悪い成績でない彼氏たるものじつとしてはゐられない。そこで親父と相談の上、上京遊學といふことになつ

た、尤もこれも中學の教師の責任に一部がある。一體中學校と言ふところは決して大學、専門學校豫の備校ではないが、これも亦御多分にもれず一人でも多く上級學校入學者を出すことに依つて其學校の成績を評價しようとする傾がある。土地柄といものも考へなくてはいけない、都會の子弟こそ、何とかな上の學校へ入學して獨立出来る様になくしては他に方法が無いから止むを得なからうが、農村の長男には先祖代々から天職といふものがあるのだから何を好んで無駄金を使つて東京などへ出す必要があるんだ、とにかく中學五年の擔任教師のおだての力もあすかつていよ、彼氏の遊學が始つたわけである、全く遊學である學校だつてピンからキリまである角帽がそんなに有難いなら沼には菱がいつばい浮んでゐるし金米糖の角は皆角ばつてゐるア……………

遊學三年程の彼氏の生活は遂に親父の財政に相當の赤字を出しただけで大した收穫もなく卒業といふ段取になる、卒業して見るといよ、就職と言ふわけだがこの不景氣にそうやたらに職がころがつてゐるものではなし彼氏の成績が三井、三菱

から引張りダコになる程でないことは勿論であるからかなり悄然と彼氏の姿は郷里にボロを飾つたのである、せつかく、實にせつかくである。

彼氏の親爺が赤字を出しつゝかけた資金はこのまゝでは元も子も失つてしまふわけであるから彼氏よりも彼氏の親爺たるものちつとしてはゐられない、

學校さへ出りや何れば金ピカの官員様になつて自動車で村へ歸つて來るものと思つてゐた、望みは果敢も破られてしまひ、その上學校を出た息子がブラ／＼と遊んでゐることが近所への口頃の誇りが失はれそうである赤字填補の問題以上に惱ましきものであつた、それから彼氏の親爺の活躍に移つたのである、かつて村會議員の一度もしたことがある、親爺は茶飲話にも政治問題をかつき出すだけに村の政治屋である、

村の政治屋にはどかく陋策を講ずることの好きなのが多い息子の就職運動にいよ、田舎政治屋の手腕が働くことゝなつた。

無着陸ではとても讀切そうもない、何の何左衛門といふ長々しい彼氏の親爺の名刺は選舉運動の

その様に方々へバラまかれていつた。けれどもアスピリンが直ぐさま熱をさます様な即効はなかつたなかつた。とても決して失望してはいけない。人生は何時何處にチャンスが轉つてゐないものでもない。

その頃彼氏のお父が借金理の方法を講じやうとよせばよいのに株なんかやつたのがもとで先祖から傳つた少しばかりの田畑を取られ少々腦の具合が狂つて來てゐたのが近頃度を増して來てゐた。彼氏の親爺にしたところさうした兄弟をそのまゝ見てもゐられず親戚合議の上でいよ／＼腦病院に入れるといふことになり、附添役は夏羽織に扇をバチつかせ彼氏の親爺である。こゝから腦病院の診察場といふわけだ。

腕が／＼といふわけではなく何處へも顔を出したがつたり、つまらないものゝ會長、顧問に奉られることを好む點で地方的にはかなり偽名の高い院長醫學博士——尤もこの博士號は現在やつてゐる仕事の上から得たものでなく、蛙の臍があるとかないとかの研究で巧みにありついた博士號であるが、博士を有りがたがる人々を脅すには充分である

——杉本博士が、型の如く白い手術衣に宿醉の目をとろんとさせて廻轉椅子の足をかゝとでぼくぼくと音させてゐる、うら成かばちや然たる看護婦に連れられて入つて來たのが彼氏の親爺と患者たる彼氏の叔父である。

醫者を神様の様に有りがたがる田舎人の癖で診察室に入つて來た彼氏の親爺はやたらにベコ／＼おじぎばかりして博士の前に腰かけた。

すると、博士は勿體らしく脈をとる可く彼氏の親爺の手を握つた。驚いたのは彼氏の親爺である。「先生！先生！腦のおかしいのは私では御座いません。この（傍を指す）男がさうです。私では御座りません」

彼氏の親爺はかなり狼狽して手をふり放つた。然しそんなことで驚く様な杉本博士でない。相當荒つぽい患者には手なれてゐるから……

「まア／＼お静かになさい、それが氣の違つた證據です。さゝ目をつぶつて……」

「冗談じや御座いません。先生、氣違ひは此處にある男です。わしじや御座いません。手を放して下さい」

彼氏の親爺は必死になつて博士の手から脱しようとした。

「ハ、ア、よほどのばせてゐますな。コレ／＼（看護婦をあごで招き）じつとしてゐる様に押へてゐなさい」

と博士は何處までも冷静である。その間傍に腰かけた本當の氣違である彼氏の叔父は黙つてニヤ／＼とこの場の有様を眺めてゐた。

杉本博士の患者間達の診察が物の三十分もかゝつてゐる時診察室に入つて來た親戚の老人の取なしによつて此處にべら棒な診察の幕はとぢられたが彼氏の親爺だけはすつかり憤慨してしまつた。

杉本博士にしてもこのまゝでは過ぎず、若し又この事が世間へ宣傳された日にはたしかに營業にさしつかひが起るであらうことが想像されたから、早速別室へ招いてお世辭やら茶菓子やらで馬力をかけたから世間話に憤慨を和げかけた。世なれた博士は世間話から彼氏の大學を出たことなどを祝つたのでぐつと親爺の機嫌がよくなつた。よくなつて見ると急／＼思ひ浮べられて來たのは他ならぬ息子の就職問題である。

チャンスー、そんなことは言はなかつたけれども此處ぞとばかり彼氏の就職に就て博士に頼むだけのすばやさがあつた。

「宜しいです、引受けました。私も割合に近すぎも多いから出來るだけ奔走いたします」——といつた博士の言質を得た親爺はその日はそのまゝ／＼かへつた。

杉本博士にしたところで引受けはしたものゝおれそれといふ口は見當らず見當らないと言つてやゐるのも間違ひ診察の一件が氣になつて仕方のないのも尤だ。

それから半月後。

杉本博士からの手紙が來た。

「拜啓農繁期いよ／＼御多忙のことゝ推察仕り候（その實推察なんかしてゐないのに）陳者（下ればでもいゝのだ）先般御申越の御令息就職の件各方面に口をかけ候處（これは全くうそである）目下不況にて御希望に添ふ如き口無之就ては今回本病院にて會計一名入要に候へばせひ本病院會計主任（主任も部下もあるものか一人つきりなんだが）に御願ひ致し度く貴意を得たく此の段お願ひに及候

(お願どころか、いやだと言つてもらひたい位)尙  
乍末筆例の件(誤診)世間へお洩し下されまじく呉  
々も懇願奉候」といふわけだ。

彼氏の親爺が過つて診察されたばかりに愈々  
彼氏は月給三十圓也で八月の初め、同輩はとつ  
に働いてゐる時から四月も後れて杉本共済病院會  
計主任に納つたのである。

今朝も彼氏はアルバカの上衣の背に青田の風を  
はらませながらほどからぬ時の病院へ勤めに出て  
行つた。

歸りは毎日夕方である。

息子の歸りを待ちながら彼氏の親爺は縁側に蚊  
遣火の煙にむせ／＼させて何時になつたら息子の  
月給で家の赤字が埋まるだらうかと太い溜息を洩  
らすのであつた。

夕顔のはの白い垣根の邊を一匹の運螢が悲しく  
光つて飛んでゐる。



# 「身邊雜集」

吉 澤 健

## 1 黒土會の分裂

黒土會が思想的な相違から分裂を餘儀なくされ  
たのも想起すれば新緑の頃だ「農村生活のモダ  
ン化」を提唱した自分や鈴木君が酷く窘められた  
のもその當時だつた。

重農主義對モダニズム、此の問題を討検する  
前に、吟味を要するのは黒土會の三木光雄氏だ。  
自己は己に博識多才、常に何も彼も批判的に眺め  
なければならぬと云ふ自惚屋。不拘氏の論は何  
時も日和見のであり、妥協性を多分に持つてゐる  
ブルナラズプロナラズ、軟派にあらず硬派になら  
ず、先づ理解ある正當派と云つた態度だ。随分好  
都合な立場ま有れば有るもので、これで進んでゆ  
けるとするなら結構なことだが、兎に角、氏の日  
和見の態度とインテリ臭さを私達は極度に排撃  
する。

譯の分つた様な分らない氏の(氏自身は重農主  
義と名づけてゐる)イデオロギーを中心として石  
部金吉揃いの黒土會が如何なる活動をなすか、私

達は氏及び黒土會の今後に注視の瞳をおこたらな  
い。

## 2 農人としての三野氏

何でも雨の日、七リと旬頃かと記憶する、郡山  
の病友を見舞つて歸途半驛へ下車、好間村龍雲寺  
原に三野混沌氏を訪ねたことが有つた。用件は本  
誌の創刊に際して種々と教へて戴くことや、私目  
身話たい氣持とが手傳つてゐた、縣道から右へ數  
丁急斜の坂を登りつめた所が三野氏、若きカーベ  
ンターの家である。前の宅地は整然とした梨園で  
開拓後大分過ぎたらしく土壌もよく耕耘されてゐ  
る、梨園の下作として栽培されてゐる草イチゴは  
新種レツチストオポール種、垣根づくり植に植ら  
れた葡萄、氣持よく成育してゐるの苹果は三年生  
らしい。

三野さんは健康を害ねられて仕事を休まれてゐ  
られた、進められるまゝに汚れ足も碌々洗はず上  
り込む、八疊二間に仕切られて、これが氏の一家  
族の寢室であり、食堂であり、書齋でも有るのだ  
らう。小供は四人みんな潑刺とした元氣さだ。奥  
さんは三野氏とは好一對のお方で唯れでも本當に

好感を持てる人である。

用件を語り終ると、もう私達の話は農業上のこ  
とへすべつてゆく——畑一町歩餘、主に梨園で下  
作に草イチゴを栽培されてゐる。農業經濟から加  
工、販賣方法に就てまで精細に考へられてゐられ  
るのは驚かされる。

その技術理論に於ても、學究的に四年も研究を  
なした自分など、梨剪定の一事ですらすらに回ま  
された形だ。肥料、土壌、農業經營にこんなに眞  
剣な研究を續けられてゐられる、

こうした氏も新らしい農業經營に憧憬を持たれ  
てゐるのは否められない。そして漸進的にその方  
向へ歩み出してゐられる様だ。これでこそ本當の  
農民作家だ。氏の健康の回復を希ふとともに健康  
に復つた時、氏の生活に、それは正しい幾つかの  
變化を見出せると思ふ。同時に新しい氏の生活か  
らの作品も期待出来るだらう。

本誌へも今後心からつくして下さること、話  
に思はず時を過ぎ過ぎまで御馳走になつてしまつ  
たことを心に詫びながら挨拶もそこ／＼に氏の宅  
を辭した。氏は何となく物足なく幾度も引き留め

られた、初めて氏と會つてみて本當に教へられたことが多かつた。

生活の中から湧き出すもの、それが氏の詩なのだ、文學啓蒙なんて現在農民間に考へられないと云ふ氏の言葉は何かしら暗示されてゐた様だ。自分とも今後必ず話の合ふ人等々、降つてゐた雨は霽れあがつて午後の陽ざしがゆるかに自分を照し出したのは平町に程近い邊だつた。

もう秋だ！今頃はあの整つた梨園に太白や晩生長十郎がデカ／＼熟れてゐるだらう。そしてその下に病癒えした氏の新しい生活が繰繰げられてゐるではなからうか。歸じな約束した松月の菓子をしこたま抱えて明日にでも訪ねる心算である。詩人としての三野氏、農人としての吉野さん、ごつちにしても私の尊敬出来る人だ。

### 3 私のこと

本誌の發刊が愈々具體化して、創刊の編輯は私が責任を持つことになつたのが八月二日

四日！郡山から學友の危篤が報される、取る物も取あひす友を見舞つた時は、すでに醫療も榮養も充分でなかつた友は、燃ゆるが如き青春の希望

も果さず、古い母、幼な妹、近親の人達に見守られ白玉樓の身となつた後だつた。行年二十四才、農藝化學の研究に没頭すること四年、今むくいられずして夭折をとげし友、その後の假埋葬、追善供養と蒼々忙々の裡に日は過ぎた。

友の進みし農藝化學は私のこれから迫る研究の途なのだ。郡山からの歸途中に、農藝化學へと！私の覺悟は強く強く根ざしていつた、化學藥品試験材料の購入、郡山から家へそれからまた平へと移つた私の糧の追はれる幾日かが續いた。

嘘の様な事實、その生活の中に強く伸びてゆく研究心！

丁度其の頃、ハツビー堂主栗原君が謄寫印刷に多忙なるを幸、學生時代の僅かな經驗を便に臨時に働かしてもらふ事になつた。或る夜は寢もやらず、或は未熟な技術故に苦しみ、心ならずも一ヶ月は過ぎ去つてしまつた。その間本誌創刊に對する責任も感じてゐたし、二三の誌友から發刊催促を受けてゐたり氣が氣でなかつたが、強い研究心を尙あをりたてる幾つもの事件が起つた。そして一寸の筆執る間さい私に與へてはくれなかつた。

疲勞しきつた身をさゝいて再び故郷の土を踏んだのが九月の中旬、型だけの研究資料を集めて直ちに研究に取掛る、四五日して木田君からの手紙に忘れかけてゐた責任感が私の胸に甦へる………こうした譯で本創刊は木田君が大體原稿の整理もなし、印刷費まで用意してゐて呉れた。私としてはたゞ本誌をお座なり物にして終つて申譯ないと思つてゐる。

現在私達のグループはみんな愉快だと云つてゐる。木田君も鈴木君も眞剣に考へてゐて呉れるし私自身も本誌を何處までも地味な步調で進ませたいと考へてゐる。

唯一人の學友を失ない、故郷に一人の友は病む當にならな私へ見切をつけたブチブル思想にさらはれたお嬢さんは嫁でいつた。こうした現在の私の心に秋は滅入つて寂みしい、だが、ブルデョア社會の缺陷を呪ながら果てゆきし友を偲ぶ時、私の血潮はたぎりたつた。

重農主義にもモダニズムにもあまり關心を持たなくなつた最近の私、しかしてまた何處へ行かうといふのか——(印刷に追ひたてられながら・拾・七)

——次號の編輯は木田、佐藤の兩君がやつて呉れることになつた、私は暫く休ましてもらふ。

本號の私の詩についてあまり批判して戴きたくない。多忙なため舊作をそのまゝ載せたのであり、少なくとも現在の考へとは全然異つてゐるのだから。

秋 (遺稿)

鈴木貞子

主去りてあはれさびしきこの庭にいちらしく咲くコスモス愛し  
芋畑にさびしく啼ける虫の聲まひる静かに秋たけにけり  
夕ぐれを山のふもとに佇めば萩はろくそよ風に散る  
かぎりなきめぐみに光る秋の陽を浴びつゝしばし見とまろびねつ  
はろくし丘より見ゆる青稻田細く流るゝ一筋の川  
コスモスの花咲く庭に腰かけて宿の女の物語りきく  
火にかざし細長き手をしみてとみつめて心動かざりけり  
かるやかに君は歌へどいかにせん我が胸痛しやよ許せ君  
かゝやきに秋の光に照りはえて百日紅は今盛りなり  
稻の香のたゞよふ畔を吾行けばいなごとぶなりくさむらのなか  
雨の日を露に濡れつゝ山の道黒きマントの君は行くなり  
しのびつゝあふせうれしむ秋の宵かのためゆらよそどろなりけむ

編輯後記

木田

編輯の責を負ふてゐた蛭田君が農藝化學の研究に没頭、小泉君の疾病、志村、鈴木兩君の上京、で無責任な人達にかまはず私一人で大體の編輯を濟す、蛭田君も氣の毒だからとお腰をあげたので助けてもらつた。誤字の多かつたこと、紙面の都合で體裁もなにかまはす詰てしまつたことを御わびする。

巻頭「夜明けまで」は藤原君が若草にゐた頃の作。

氣を腐らしてゐた蛭田君の代に伊藤君に舊作であつたが隨筆を寄せてもらふ尙早くから稿を下された近邊の諸兄姉にも發行のあまりにも遅れたことをおわびする。

私達は好んで感情的な敵もつくりたくないし、争もしたくない、だが賣られた喧嘩、濡衣は何時も臆とばすだけの勇氣はある。

この發行までに郷友新報の渡邊氏、先驅の大井川氏には随分とお世話になつた。松浦氏にも亦色々な點で迷惑を掛けてすまなかつた、末筆ながら深謝の意を表す。

す。

私達のプラタナスには進路も理想もある、だが本號はどう考へてもまとまりがとれない様で恥かしい。それを責められると口答出来ない。たゞ多忙だつたことを諒して戴きたい。

二葉舎の犠牲的贊助を最後に特筆して置く。

蛭田君の短篇集を今度出すことにした。頭價は三十錢位だ豫め申込んで置く。

燈下親しむの秋御健康を祈る。

大號こそ、キツトみんなの期待にそむかない様なのをくりす出す。

「プラタナス」社小規摘録

・小社は文藝誌「プラタナス」を隔月に發行す

・小社は文藝講演會その他を随時開催す。社を維持するため毎月十五錢宛會費をお納め下さる方を會員とす(會員には「プラタナス」發行毎に二部贈呈)

・會員中から同人を推します同人は毎月三十錢お納めして戴きます。(「プラタナス」發行毎に四部贈呈)

・小社に特別の御厚意をお寄せ下さる方を社友として優待いたします。

・誌友とは本誌の一般讀者を指す。

・同人會員誌友諸氏の左記御寄稿を歓迎致します。

・評論、創作、小品、詩、短歌、其の他(但し時事に觸れないこと)

・原稿は發行前月の二十日に締切ます、遅れたのは次號へ廻します。

・原稿の取捨は編輯者にお任せ願います。原稿送附は當分小社宛にお願致します。

【次號原稿締切十一月三十日】

昭和七年十月十二日印刷納本

(價 十五錢)

編輯兼發行人 蛭田

印刷所 二葉印刷所

發行所 プラタナス社

◎祝 創 刊◎

入山探炭株式會社

磐城炭礦株式會社

古河礦業株式會社

五十嵐炭坑不動澤礦業所

所長 高階一郎

杉山炭礦主 杉山今朝吉

小田炭礦主 小田吉治

小田炭礦萩原礦業所

萩原申八

小野田炭礦主 戸部光衛

東部電力平營業所

二本松電氣株式會社  
小名濱營業所

片倉製糸株式會社  
平月見町

湯本信無盡株式會社  
湯本町 電四七番

石城郡町村長會

石城郡小學校長會

石城郡銀行組合

平町公立學校長懇話會

謄寫印刷一般  
圖案ホスターの研究

ハッピー堂

平町堂ノ前一六

看護婦急派の求に應じます

平看護婦會

平町南町  
電話三〇七番

樋口産婆學校

附屬 樋口派出看護婦會

樋口家政婦會

常磐線湯本町  
(電一〇八番)

國、漢學、獨學者の指導

塾生募集

福島縣石城郡磐崎村上湯長谷  
從六位 石川虎之助



電話九番・九九番

寒暖計體溫計  
各種農藥藥品  
化粧品一般

## 山野邊藥局

東華皇漢藥研究所

藥劑師

山野邊東次郎

平町五丁目

乾物雜貨問屋

## 吉田恭平商店

常磐線湯本町横通り  
(電話五二番)

書籍、文房具、諸帳簿類

## 清光堂書店

平町二丁目

電話一三一番